

ドイツ語ウェブラーニング

—補助学習のための教材の開発と学生の反応—

名 執 基 樹

1. はじめに

もはやe-learningは開発能力のある教育者や研究者だけがたずさわるという領域ではなくなりつつある。商用の一般向けに作られたソフトウェアなどにより教育用コンテンツの製作は以前よりはるかに容易になっている。また、書店には改編可能なサンプルCDつきの分かりやすい解説書が数多く並び、ウェブ教材などを独自に作ろうと思った場合にも以前よりずいぶんと敷居は低い。もちろんe-learningには教育機関全体で取り組まなければならないような大掛かりで高額なものもある。しかし、個人で対応可能な、技術的に「軽い」タイプのものについて言うなら、いわば新しい種類の文房具（兼教材）として日々の教育に即した使用が可能な段階に入ってきたと言えるのではないだろうか。なかでもウェブ教材はその作りやすさ使いやすさという点で優れており、しかもほとんどのパソコンで利用可能である。また、プリントと書籍の間とでも言えるような柔軟かつ高度な発信性を持ち、メディアとしても興味深い。そして何よりパソコンならではの印刷物にはない多様なインタラクティブな細工が可能である。

この論文では2004年度から富山医科薬科大学において実施したドイツ語学習支援用のウェブページについて報告したい。この学習ページのねらいは正規授業の支援であった。したがって、いわゆるCALL（Computer-Assisted Language Learning）授業の実現を目的にしたものではない¹⁾。対面式の従来の教室内の授業を教育の中心にすえた上で、その授業を補助する役割をウェブというメディアに担わせたのである。製作には市販のホームページ製作用ソフトとやはり市販のそれに対応したオンラインドリル作成キットを使った²⁾。独自にJavaスクリプトを用いた学習ページを解説書を片手に作成して加えたりもしたが、全体としてこの種の教材の開発はやはり格段に容易になってきているという印象を得た。

以下では、まず今回の試みのねらいについて説明したのち、製作し公開したウェブページを簡単に紹介してゆきたい。そして、それについての学生の反応を実施したアンケート結果を中心に報告し、最後に今回の試みから得たウェブによる学習支援の手ごたえと課題を今後への展望という形でまとめてみたい。

2. 補助学習としてのウェブラーニングねらいと製作したコンテンツー

(1) 教室内での学習の限界と解決策としてのウェブ

さて、今回の試みの出発点は私が第二外国語の授業を担当する中で感じてきたいくつかの問題の克服にあった。問題は多様で、第二外国語教育が現在日本で置かれている一般的状況に起因するものもあれば、個人的な授業スタイルに起因するものもある。しかし、つきつめて考えてゆくと教室内での教育の限界というものが背景に見えてくる。すなわち、

① 授業外のトレーニングを支援する必要性

今日、第二外国語学習に割り当てられている授業時間数は少なくなってきており、基礎知識・基礎表現に的をしぼって行ったとしても、実践的なトレーニングを課すとするなら（＝講義形式の一方通行的な授業を避けようとするのなら）、一通り練習するだけで授業時間はつきてしまう。しかも、ドイツ語などの第二外国語（特に文法）は英語以上に複雑で混乱も起こりやすい。上手に復習してゆかないと学生は忘れていくことすら忘れていて、授業時間内で理解できたとしても後でやらせるとできないということが多々ある。また、勘違いを起こしやすいツボのようなものがいくつか存在し、授業内で指摘して一通り練習するだけでは不十分な場合が多い。授業外での学習を促すような何らかの取り組みが必要である。

② 自己学習の手引きの必要性

教官がプリントなどを取り入れ、教科書に依存しない独自の授業進行を工夫することはよくあることであり、限られた授業時間の中で教師ができるだけ授業を充実させようと主体的に取り組むことが好ましいのは言うまでもない。しかし、いったん教科書を離れてしまうとそうした柔軟性が逆にあだになることもある。特に外国語学習の場合には予習が問題である。会話のように覚える内容が毎回一定量課せられる授業などでは、学習内容を学生が事前に自由にチェックできるようにしておく必要もでてくる。煩雑でなければ前もってプリントを配布しておいても良いのだが、そもそもプリントで指導できる内容には限度がある。学生が授業外で必要に応じて手軽に参照でき、かつ教官が授業にあわせて柔軟に変更できるような媒体が何か必要である。

③ 苦手意識を持つ学生に対する自主学習支援の必要性

学生も多様化し、外国語の学習という点でも学習習慣という点でも「慣れていない」学生が目につくようになってきている。しかも、教員や他の学生とのコミュニケーションにも「慣れていない」場合さえある。授業内での指導では到底手が届かず、また、一対一でフォローするにもある程度学生自身が自分で弱点を克服できるようになっていないと、せっかくの個人指導も学生に苦手意識を強めさせるだけのすれちがいで終わりがかねない。苦手意識を持つ学生の授業外での自主学習を支援する対策が何か必要である。

④ 言葉以外の学習の必要性

ドイツ語に関心のある学生というのは、単にドイツ語の文法や表現に関心があるというよりも、異なった文化、異なった社会としてのドイツに対して関心を持つ学生のことである。そして、そのための言わば基礎的な行動力としてドイツ語に魅力を感じているのである。しかし、彼らの関

心に応えられる内容を数多く授業に盛り込むことは限られた時間の中では困難である。授業では言葉の向こうにあるものよりも、どうしても言葉そのものの方に多く時間が費やされてしまう。そのためともすれば言語の向こうにはる筈のリアリティを十分に与え切れないうまま、そのリアリティの部分は逆に授業外でのそれぞれの学生の自主的な（＝それぞれの勝手な？）体験ないし情報収集（その多くはテレビなどだが）に任せる形になる。これは第二外国語教育が持つ一つのディレンマでもある。しかし、ならばいっそ発想を転換して、教室内の授業だけが学習の場ではないという立場を取ってはどうか。積極的に授業という枠の外に、そしてできればキャンパスの中に（授業とは別に）外国語世界との交流の場を設けてゆくという発想も必要ではないか。

⑤ 一過的な教育を超えた教育ヴィジョンの必要性

教師にとってつらい現実ではあるが、学生というのはしょせん期末試験後は授業内容をあっさり忘れてしまいうる存在である。しかし、本来教育の効果は試験などの一過的な成績で判断すべきものではない。次の世代の担い手として彼らが学んだ関心や活動を生涯にわたりどの程度維持してゆくのかわかり、つまり、（ポイントを絞って言うと）自己活動可能な学習者として彼らがどう育っているかの方が実ははるかに重要なのである。だとすると語学教育としての教育目標を高く掲げるよりも、ある程度言葉の運用能力の方は刈り込んだとしても、学習上（＝継続学習上）必要となる知識や姿勢、関心の育成というものの教育にも気を配ってゆくことが必要な筈である。完成した語学能力の教育（これが教養段階どころか学部段階でも達成できない目標であることは明らかなのだが）よりも、自学可能な知的社会人としての教育の方が重要ではないかということである。しかし、だとすると授業だけで学習が終わるかのような教育の仕方も見直してゆく必要があるのではないか。意図的に学生に授業外での（それもできれば生涯にわたる範囲での）関心形成や取り組み（検定試験やドイツ訪問などは言うに及ばず）に誘う教育の仕組みも作っておく必要があるのではないか。

以上、何点か自戒も込めながら教室内に留まる教育の問題点とそれを乗り越える必要性を指摘してみた。ここで指摘した問題の背後には、第二外国語教育に与えられた授業時間数の限界や多様化する学生の側の学習意欲や態度の問題などさらにいろいろな問題がある。しかし、いずれにしろそれらは簡単には変えることができない、われわれにとってすでに与えられた状況になってしまっている。しかし、その一方でそもそも外国語の修得は授業などという場で完結しようがない息の長い作業である。ではどうしたら良いのか。これは教師の役割をどこに見るかという問題でもある。教師が自分の役割を個々の授業に限定し、あとは大学生なのだから学生が自主的に取り組むべきだなどととらえている限り、このストレスの多い状況は続くことになる。むしろ教室内外の限界を積極的に認め、時間的には学習者の大学時代での学習という大枠のなかで、空間的にはキャンパスという学習環境全体を意識した上で学習者をどう支援するか、教室を越えた立場から方策を練る必要があるのではないだろうか³⁾。

こうしたとき、まさに教室という枠を飛び越えるという点でウェブは問題解決のための有効な装置の一つと考えられるのである。

実際、ウェブ学習は次のような利点を持っている。

1. 自主学习可能なインタラクティブな教材としての利点。
2. いつでも柔軟に(再)編集でき、常時公開可能なメディアとしての利点
3. 自ら自立的に関心を育て、学習を継続・展開させる契機としての利点

上記①～⑤の問題に即して述べてみよう。

まず、1に関してであるが、ウェブは単に学習機会を教室外に作り出すだけでなく、マウスでオブジェクトを隠したり現したりするなどの簡単な細工から、解答をボタン一つでチェックして正解／不正解を即座に学習者に伝えるといったより複雑な細工まで、印刷物にはできないさまざまなインタラクティブな「指導」をスクリプトなどを通してページに盛り込むことができる。これにより教科書やプリントだけではできないようなより臨場感がある学習が教室以外でも可能となる。授業以外のトレーニングの場(①)、予習や復習のための手引きの場(②③)としておおいに利用できると考えられるのである⁴⁾。次に2についてであるが、ウェブであれば通常の出版物と違い、学習内容・学習課題を常時公開しておいて、それをまた適時変更することが可能である。教室とは別の所に予習や復習のためのチャンネルを開いておいて、かつ毎回の授業づくりに対応させることができるのである(②③)。また、3についてであるが、授業では扱えない発展的な内容や一見学習上意味がないように見える面白ネタでさえ、ウェブであれば自由に提供し、学生の主体的な学習や関心の深化を促すことができる。授業外にもう一つ教育の場を、しかもシラバスの内容をも超えたコンテンツさえ盛り込める自由な場を提供できるのである(④⑤)。とは言え、もちろんウェブだけが教室外での学習の場ではないし、必要な学習が全てウェブで補える訳でもない。そもそもウェブだけで上述の問題が解決されるとは考えにくい。しかし、学習の手がかりとなるような情報や刺激を与えたり、一人で扱うには面倒であったり自分からは問題があることに気づくことができないような学習課題に対しプログラムにより取り組みを容易にしてやるのがウェブにはできる。自主学习の手引きとなるような支援効果がウェブには十分に期待できるのである。

以上が、ドイツ語学習のウェブページを立ち上げた動機である。ちなみに、ウェブページの製作にあたっては、ネット経由での通常の使用とは別にもう一つ別の使用方法も念頭に置いていた。htmlファイルとして製作した教材はウェブで公開するだけでなく、CD-Rなどに落として学生に課題として配布することもできる。この点も魅力であった。プログラムもJavaスクリプトで書かれたものであれば、そのまま個別に学生は自分のパソコン上で動かすことができる。こうしたCD配布の展開についても、今回の取り組みの中では試みしてみた。

(2) 製作した教材

さて、では今回どのような教材を製作したのか、以下、タイプごとに分けながら、その目的と仕組みを紹介してゆくことにする。

① 表現学習のページ

会話系の授業では、毎回プリントで必修表現を配って授業内で覚えるよう指導してきた。しか

実用独語1/9回目 必修表現 紹介・あいさつ

*[aus]表示をオフ、[an]表示をオン

注: 左右の表が(若干)ズれる場合もあります。

◆ **という名前です。

aus	an
そして(接続詞)	und
君(二人称親称)	du
君の(所有冠詞)	dein ~ [ei]
私の(所有冠詞)	mein ~ [ei]
Familienname	名字 ファミリーエン・ナーム *ie (ここではie)
Vorname	名前フォア・ナーム [v] 7
会話	
● 私はミハエルです。 で、君は何という名なの？	● "Ich heiße Michael. Und wie heißt du?" (× heißt)
○ 小林よ。	○ "Kobayashi"
● それは君の名前なの？	● "Ist das dein Name?"
○ いえ、私の名字よ。	○ "Nein, mein Familienname."
● で、君の名前はどのような？	● "Und wie ist dein Vorname?"
○ ユリコよ。	○ "Yuriko"

図1. 表現学習のページ

片面を隠しながら学生に使わせているのだが、このページではJavaスクリプトによって日本語／

文法確認 前期 格の変化(3) 冠詞類

*[aus]表示をオフ、[an]表示をオン

【注意】表の表示が(若干)ズれて、読みづらくなることもあります。

◆ 2つの冠詞類(der の仲間、 ein の 仲間)

(1) der の仲間: 「定冠詞類(dieser型)」

指示関係	dieser あの・その(英: this, that) jener かの(彼方の) solcher そのような(英: such) jeder 各々の(英: each)
量関係	aller 全ての mancher 多くの

・derと同様の変化。
・語尾 -er が変化(derと同じ);

dies^{en} er es em

solch^{er}

(2) ein の仲間: 「不定冠詞類(mein型)」

図2. 文法学習のページ

し、すぐに覚えられる学生もいれば、なかなか覚え切れない者もいる(実際、予習をしておきたいのだがと相談を受けたこともこれまでしばしばあった)。また、覚えたとしても次の課に入ると前のものは忘れてしまうということが多々あった。そのための予習復習用に製作したのがこのページである(図1)。授業で使っている語彙学習用のプリントは左右二段になっていて、例えば左の段には日本語が、右の段にはそれに対応したドイツ語が並ぶようになっている。授業内ではそれを半分に折り、

ドイツ語を消したり戻したりすることができるようにして、一人で学習していても授業のプリントと同じような効果が得られるようにした。このページについては毎回の授業用のページを製作し、さらにそれに対応する5分間のミニテストのページ(後述)へのリンクを貼っておいた。

② 文法学習のページ

格変化、動詞の変化など、学生が苦手とする文法項目を取り上げて解説するページも作った(図2)。ここでは学習事項の要点をまとめるとともに学生が陥りやすい間違い

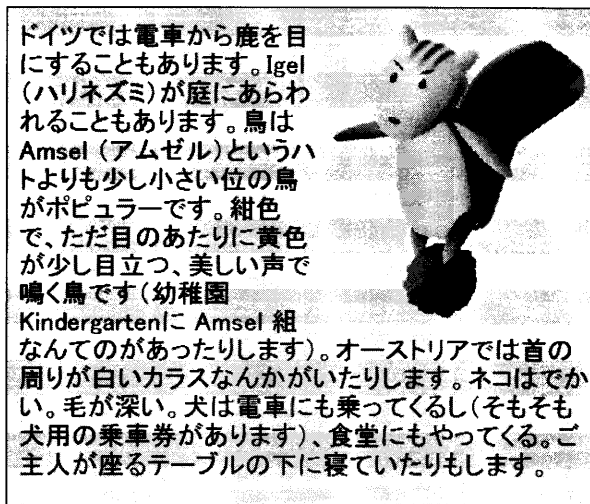


図3. ミニ知識のページ

学作品中の決めのフレーズ、ドイツ語のなぞなぞ、勘違いしやすい文法項目や“mal”のようなちょっとした表現の解説などが書かれたページも制作した。このミニ知識のページはミニテストと同様に表現学習のページ(①)や文法学習のページ(②)上にリンクを貼り、ボタンをクリック

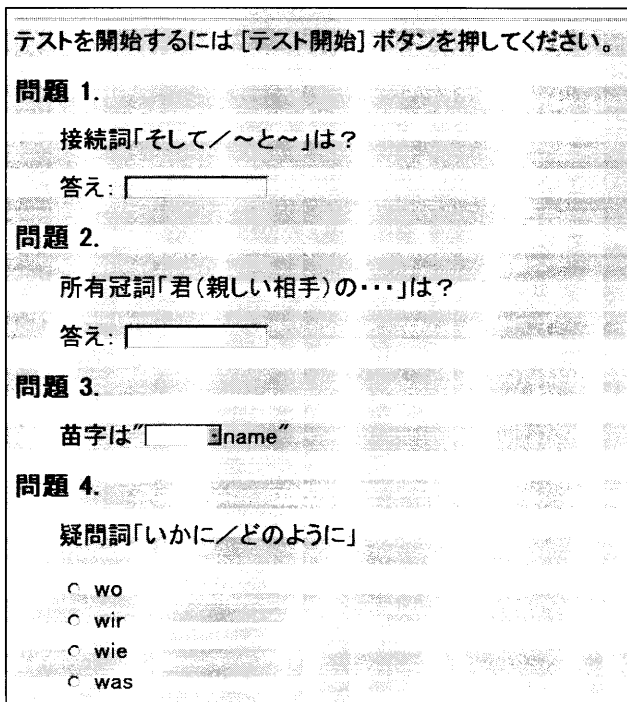


図4. ミニテストのページ

についても指摘しておいた。しかも単にそれらを書き示しておくというのではなく、プルダウンメニューやオブジェクトのオン・オフ機能を使って、学生がマウスでページを操作しながらその内容を確認できる仕組みにした。そしてさらに、表現学習のページと同様に確認用の5分間のミニテストページへのリンクも貼った。

③ ミニ知識のページ

ドイツおよびドイツ語についてのミニ知識、たとえば、ドイツの食べ物、ドイツで目にする生き物、方言と地域性、書店などの日独の違い、ドイツ文

クすると自作のマスコットキャラクターとともに別のウィンドウで表示されるようにしておいた(図3)。授業では言いつくせなかった面白ネタや私的な感想などもそこに書き込んだ。ボタンにはどの内容のウィンドウが開くか説明をつけず、学生にクリックして発見させるようにした。遊びながら興味と関心を広げさせたかったからである。

④ ミニテストのページ

これは市販のe-learning教材作製キットにより作ったものである。学生が選択問題や記述問題にホームページ上で答え、送信ボタンを押すと、各問いの正解・不正解と正答、合格・不合格が結果となって瞬時に返って来る仕組みになっている(図

4)。ただし、返ってくると言っても、Java スクリプトで書かれているので採点処理は実は学生側のパソコン内で行われている。したがって、自分のパソコンに問題のページを保存しておけばインターネットとの接続を切ってから何度でもテストを受けることができるし（実際に学生には自分のパソコンに保存して使うことも可能であると伝えておいた）、CD で学生に配布することも可能である。テストは時間制限五分という短いものである。手軽に使えて、学習内容を確認するにはこの程度の時間のものが良いと考えた。内容は基本的には表現学習のページや文法学習のページに対応して作られ、表現学習については授業毎回分にさらに小テスト対策と期末対策のものを作り、文法学習についてはそれぞれの重点項目に応じたミニテストを用意した。

⑤ 簡易自動翻訳のページ

1) 冠詞(類)を選択
ある/1つの(不定冠詞)
その/この(指示)
私の
君の(親称)
solcher そのような
彼(男)の/それ(中性)の
彼女(女)の/彼ら(複数)の
あなた(敬称)の
jeder 各々の(英: each) イーダー
aller 全ての
~ない(否定冠詞 英語のno)
私たちの

2) 名詞を選択
Kind 子供(中)キント
Freundin 女同士の友人・ガールフレンド(女)フロインディン
Männner 男たち(複)メナー
Student 学生(男性弱変化)シュトゥデント

3) 格を選択
~の
~に
~を

◆ Ihr Ausdruck (貴方の表現)
[Input Field] [Go]

◆ Mein Ausdruck (PCの文)
[Input Field] [Go]

図5. 簡易翻訳のページ

ミニテストとは違う、もう少し時間をかけた練習が行えるようにと簡易翻訳のページも作った(図5)。これは学生がそれぞれのプルダウンメニューで名詞や冠詞や格などを選ぶと、それを組み合わせて正しいドイツ語をJava スクリプトのプログラムが答えてくれるというものである。完成したドイツ語はボタンを押すと空欄に表示されるようになっており、学生は書

き込み専用の別の空欄に自分のドイツ語をあらかじめ書き込んでおいて、プログラムが作り上げたドイツ語と自分の書いたものが比較することができる。これによって何通りもの組み合わせの作文を学生は自ら選びつつ練習することができるようになる。このページについては名詞や形容詞の格変化、完了形、関係文など、学生が苦手とし、かつ反復練習が効果的なものについて作っておいた。

(3) 制作と運用の経緯

ドイツ語学習ページのおもなコンテンツは以上である。しかし、これだけのコンテンツを用意するのは大変な作業で、結局すべてを一度に立ち上げることはできなかった。後半は学生の学習ページへの反応を見ながら、授業の予習に何とか間に合うように授業と競争で新たなページを加え完成させてゆくという格好になった。その際、逆に、やっているうちにあったほうが便利だと気がついて後から作り始めたというものもあった。

その経緯についても簡単に触れておきたい。まず、①～④のページの前期授業分については授業開始以前に全て準備しておくことができた。しかし、後期分は授業を行いながら順次追加してゆく形になった。

⑤の簡易自動翻訳のページは後期に入ってから、一部学生のもっと練習できるページを増やして欲しいとの要望を受けて作成したものである。逆に③のミニ知識のページは授業に直接関係した表現学習や文法学習のページ(①②)の作成に追われていたため、結局、後期分は手が回らなかった。しかし、それとは別に、学生の希望に応じてこれらのページ(①～⑤)とは別に教科書の解答が見られるページや簡単な読み物が読めるページなどのいくつかのページ(まだ試行段階ではなるが)も加えていった。

冬休み前にはホームページからいくつかのページをコピーし、自主学習用のCD-Rを作成し、学生に配布した。

ドイツ語学習のページを立ち上げるに当たっては考慮しなければいけない問題が一つあった。学生のパソコンの所有率である。一年次にはパソコンを持たない学生が少数ながらいて、そうした学生が不平等感を抱く可能性が考えられた。したがって、ドイツ語学習用のホームページは独自に用意したサーバー内に置き、この不平等感の問題がどの程度のものか判別できるまで、当大学のサーバーには移さないことにした。別個のサーバーに置くことで学内LAN上のパソコンでのからの利用に使用を限ることにしたのである。というのも、学内でのアクセスなら、統計実習室のパソコンなどで全ての学生が同等に使えるため条件は同じで、学生も不平等感を持ちにくいと考えたからである。ただし、学内でのアクセスに限るといっても、ダイヤルアップ接続により制限つきではあるが学生が自宅のパソコンから学内LANのネットワークに入り込むことはできる。逆に家で学習できないことに不便を感じる学生もいたため、こうした学外からの接続方法については適時紹介することとした。また、そうした学生に対してはCDの形で配布することである程度希望をかなえられるのではないかと考えた。ただし、その際にはCDの内容に対応した紙面の教材も用意し、学生がどちらを選んでもいいようにした。これに関してもパソコンを持たない学生が不公平を感じないように配慮する必要があると考えたからである。

3. ドイツ語学習ページの運用と学生の反応

学生にはこれがまだ試行段階のものであり、反応を見ながら今後の展開も考える旨を伝えておいた。学生たちの反応はおおむね良好であり、わざわざとても役に立っていると伝えてくれた学生もいた。ドイツ語学習のホームページへのアクセスは、担当した学生95名に対し後期期末試験後の2月末で875になっていた。もちろん、同一学生が何度もアクセスすることもあれば、一度のアクセスで必要部分をファイルに落として利用するケースもあり、アクセス数だけでは正確な利用状況は分からない。以下、具体的な学生の反応については2004年度に実施しておいたアンケートの結果を中心に紹介してゆきたい。

アンケートは二度行った。一回目のアンケートではおもにドイツ語学習のページの利用状況に

について尋ねた。まずはそもそも継続して作り続けるに値するだけの支持が得られているか、前期の全課程が終わった段階で調べておきたかったからである。また、パソコンの所有の有無から学生の反応が分かれることが予測されていたので、一度目のアンケートでは所有状況についても尋ねた。二回目のアンケートでは、一回目のアンケートですすである程度の支持が得られていることが分かったので、主にこのホームページの今後の方向性について意見を聞くことにした。

(1) アンケート一回目：利用状況について

アンケートは後期授業開始の初日に行った。対象にしたのは2004年度に担当した医学科と薬科学科の二クラス⁵⁾であり、受講学生74名中出席者62名の回答を得た。

利用の有無と有用性、この取り組みの是非、パソコンの所有についてそれぞれたずねたところ、結果は表1のようになった。

表 1 利用状況 (N=62)

	はい	どちらとも言えない	いいえ	はい	どちらとも言えない	いいえ
ドイツ語学習ページをのぞいたことがあるか？	45	0	17	72.6%	0.0%	27.4%
ドイツ語学習ページは役に立つと思うか？	46	15	1	74.2%	24.2%	1.6%
ドイツ語学習ページを後期も続けて欲しいか？	50	12	0	80.6%	19.4%	0.0%
CD-ROMでの配布を望むか？	23	33	6	37.1%	53.2%	9.7%
自分のPCを持ってるか？	49	0	13	79.0%	0.0%	21.0%

学期中こちらからは紹介以上の働きかけは一切せず学生の自主的な判断にまかせていたのだが、72.6%という四分の三に迫る数の学生が最低一度はドイツ語学習のページを開いており、また利用がまだの学生も含め74.2%がこの取り組みを肯定的に評価し、さらに80.6%の学生が後期の継続も望んでいることが分かった。逆に否定的な回答をした学生については、役に立たないと答えた学生は一名のみで、継続に反対する学生は0名であった。

パソコンの所有率については79.0%という結果が出た。高い所有率であるのは確かだが、所有を前提とした体制に移るには五名のうち一名が所有していないというこの値ではまだ不十分である。やはり学外利用は（当面）取り入れることはできないと判断した。

この時点でCDでの学習ページの配布ということも検討しはじめていたので、その点について

もこのアンケートで尋ねてみた。ほぼ半数の53.2%学生がどちらでもいいとの回答を返し、CDの配布を希望する学生は37.1%と期待をはるかに下回った。しかし、これはその分ウェブ上での学習で十分と学生たちが判断していたということだったのかも知れない。

表 2 自由記述回答 (文言は回答のまま)

◆ 使用経験者の意見 (12) :

- ・学内専用じゃないようにはできませんか。家からダイヤルアップでつながり方法がわかりませんでした。
- ・できれば、学内からだけでなく、自宅からでも、アクセスできるようにしてほしい。
- ・5-minute testの種類を増やしてほしい。(同じ種類でも数種類あるとか)
- ・小テスト対策に便利なのですが、学内専用なのがものすごく使いづらいです。内容はいいのに、十分に生かしきれていないのが残念です。
- ・今のように自由にできないと思えばやることのできる体制がよいと思います。
- ・休んだ時に、実用も基礎もよく役立った。
- ・最近、ドイツ語はドイツ語で学びたいと思いました。難しくなればなるほどややこしくなる、つまり、頭の中が、ドイツ語、英語、日本語とくちゃぐちゃになるのです。英語もはじめは日本語で学びますが、上ランクになると、文章で単語や文法を学んだりするので・・・。そういうサイトをつくってくれると、いいです。
- ・自宅からでもできたらよい、制限なしに。
- ・ネットだけでも十分だとは思う。
- ・ダイヤルアップの仕方を詳しく教えてください。
- ・テストの過去問を載せて下さい。
- ・特になし。

◆ 非経験者の意見 (4) :

- ・パソコンのある、なしで有利・不利にならないようにしてほしい。*P C持っていない学生の意見 (名執)。
- ・自宅にパソコンがない人が不利にならないようにしてほしい。*P C持っていない学生の意見 (名執)。
- ・インターネットをつないでなくて利用してませんでした、これからはつかいます。
- ・すいません。使ったことがないのでわかりません。

記述回答で問題点を中心に何か気づいたことがあったら書くように求めたところ、学生の意見は表2のようになった。学習ページの利用経験がある者となし者とは回答の傾向がはっきり分かれ、経験者からは家からでもアクセスできるようにして欲しいというより積極的な反応が出てきた。それに対し、未経験者(パソコンを所有していない学生でもあった)からは、逆にパソコンの所有の有無による不公平を指摘する意見が出ており、パソコンの所有の差はやはり考慮しなければならない問題であることが分かった。ただし、この点を指摘した学生は二名で、この二名はともに学内においても学習ページを利用しなかった者であった。一度でも使用経験があれば判断は違っていただかもしれない。また、そうした学生についてはそもそもパソコンの使用そのものを回避したがる傾向があることも考えられる。考慮すべき意見ではあるが、必ずしも顔面どおり深刻に受け止める必要はないと判断した。というのも、このことは逆にとらえるなら使用経験者(その中にはパソコン未所有者も含まれる)からは不平等感に関する指摘は一切出てこなかったということでもある。また、すでに見たように後期への継続に反対する学生はそもそもない。したがって、結論としては、学外からのアクセスについては今後も慎重にならざるを得ないが、

少なくとも現状の学内のパソコンからの使用が中心のやり方でなら、個人でパソコンを所有していない学生がいたとしてもそう深刻な問題にはならないと判断した。また、この記述回答では、ドイツ語の文章の学習を希望する回答やドイツ語中心にドイツ語を学びたいなどとする意見もあったが、何と言っても過去問やミニテストへの言及が目立っていた。予復習や小テスト対策など授業に直接関わる補助学習的な場として学生が高く期待を寄せている点もこのアンケートによって垣間見ることができた。

(2) アンケート二回目：方向性をめぐって

二度目のアンケートは後期の最終授業の際に行った。前回と同様に医学科と薬科学科のクラスを対象とし、履修者74名中出席者65名の回答を得た。

選択回答でたずねたのはこの学習ページの取り組みの継続への期待とその方向性についてである。結果は表3および表4のようになった。

表3 この取り組みをさらにすすめるべきか (N=65)。

はい	45	69.2%
どちらともいえない	19	29.2%
いいえ	1	1.5%

表4 何をさらに充実させるべきか (三つまで○で選択, うち特に希望するものに◎) (N=65)。

	選択 (○および◎)	◎で選択	選択の割合
ドイツ語・ドイツ文化についてのミニ知識	26	5	40.0%
文法学習について	23	1	35.4%
ミニテスト	39	10	60.0%
読み物など (単語・文法解説つき)	18	1	27.7%
基礎独語の予習用ページ	12	1	18.5%
ほか	3	0	4.6%
特になし	7	0	10.8%

取り組みをさらに進めるべきかという問いについてはやはり支持する意見の方が多く、69.2%が「はい」と答え、反対意見を選んだ学生は1名しかいなかった。一度目のアンケートの結果と比べると、進めるべきと答えた者の若干名がどちらとも言えないとの答えの方に回った形になったが、これについては後期になりすでにある程度学習ページができあがってきていたので、それ以上は期待しないとの判断があったためかも知れない。

このアンケートでは、今後充実すべき点について最大三つ、そして特に充実すべきものを一つ選択肢から選ばせてみた。結果はミニテストを求める学生が39名と最も多かった。しかし、それに次いで多かったのはミニ知識のページの充実化であった (回答数26)。授業の予復習や試験対策用としてかなり「実用的」な利用をしている一方で、授業をはなれた (= 授業では扱えないで

いた) ドイツおよびドイツ文化紹介の場としても肯定的に学生たちがとらえている姿がここからうかがえた。もっとも、この点については後期分のミニ知識のページを立ち上げることができなかったことが影響していたとも考えられる。しかし、それにしても文法学習のページの充実化などよりも直接授業とは関係がないこうしたページへの希望が多いというのは正直嬉しい驚きでもあった。

記述回答では、あらかじめ問題点をこちらから指摘した上で自由に意見を書いてもらった。前もって指摘しておいたのは、パソコンを所有している学生としていない学生との立場の差という問題が目下あること、今回の希望制でのCDを配布というのもそうした事情があったこと、したがって、パソコンに代わる端末としての携帯電話を利用するなどということも将来的に可能なら考えみたいと思うがどうか、などといったことである。

学生からの回答は表5のとおりになった。ここでは見やすいように学生の意見を学習ページ製作への支持との関係から三つに分けて表にまとめておいた(授業そのものについて書いたと思われる意見も一部混ざっているがそのまま記載した)。

表5 今後の方向性についての自由記述回答(文言は回答のまま)

◆ 「はい」の意見の者の記述回答(27) :

- CD配布やサイトを開設したことなど、すごく生徒のためを思ってください助かりました。これからもがんばってください。
- 携帯でミニテストが出来れば便利だったと思う。あと、ダイヤルアップしなくても家で見れば良いのに・・・と思います。
- 学習のページは非常に役立ったので、CD配布にしたら自宅でもできより使いやすくなるのでいいと思います。
- 冬休みに配ってくれたようなCD-Rは重宝しました。
- 携帯サイトがあれば便利だと思う。
- コンピューターでテスト勉強ができることが良いと思います。家からも接続できるようにして欲しいと思います。ただ、ここまでのことをやってくれる先生は他にいないと思っています。もっと自信をもって下さい。ありがとうございました。
- ダイヤルアップについては家でできないのでCDの方は便利でした。
- CDよかったです。
- 選択問題より、自分で単語を打つ問題が多いといいと思う。
- テストの種類をふやしてほしいです。
- ダイヤルアップなしで学外からアクセスできるようにしてほしい。
- 楽しくやろうという方向にすすめられたらいいのではないかと思います。
- 配布CDがすごかった!
- 携帯でアクセスできるサイトにするのはすごく良いと思う。
- ドイツ語を学習してゆく上で学習用のWebサイトがあったりCDを配布してもらえると、すごく助かります。時間があったら出来れば携帯用サイトもあればうれしいと思います。
- 演習を増やせば、ドイツ語がさらにわかりやすくなると思います。
- 生徒がやる気を出すような授業(今年のような)を続けていけばいいと思う。
- 携帯でアクセスできると家やあき時間にすぐできるのでいいと思う。授業プリントの答えなどもWeb上にupしてもらえると勉強がしやすいです(いつも答えを見る間もなく消してしまうので)。
- 授業でもかなりくわしく教えてもらえて、それでもわからなくなった時は、サイトなどでも確認できる体制になっていたのも、本当に勉強しやすかったと思います。携帯サイトもあったら便利だとは思いますが、そこまでしなくても今のままでも充分学生にとってよい環境だと思います。
- 携帯サイトはぜひあったらいいと思います。どこでもいつでもドイツ語を親しむには良いと思います。

<ul style="list-style-type: none"> ・学習用 Web サイトや CD の配布はとても良かったと思います。 ・Web のテストで間違っただけの箇所が見づかった (多分, Mac にのみみられる現象だと思いますが)。 ・携帯でできればよりいいとは思いますが, PC でできるだけでも十分だとは思いますが。時々, きついなあと思うこともありましたが, 1 年間とりあえず, 学習できてよかったと思っています。 ・とても親切で, 先生の指導に対する情熱がよく伝わってきました。 ・携帯サイトは良いと思います。自宅にパソコンがない人もいます。 ・すぐくがんばっておられると思い, 感謝しています。わざわざみんなに CD-R などを配布していただいたことなど, 誠実さが伝わってきました。 ・コンピューターを使わなければならないとなると正直やろうとは思わないのでし携帯でアクセスできるようにすれば, 暇な時にできるのでいい。
<p>◆ 「いいえ」の意見の者の記述回答 (1) :</p> <ul style="list-style-type: none"> ・Web サイトは, なくても十分勉強できました。後半授業がマンネリ化してて退屈でした。けど, 先生ががんばっているのがよく分かりました。クーポン券はいいアイデアだと思います。やる気 up。
<p>◆ 「どちらとも言えない」の意見の者の記述回答 (9) :</p> <ul style="list-style-type: none"> ・私はパソコンをもっているで, CD を活用させていただいていますが, 1 年だとまだ持っていない人が多いので, CD 配布は希望制がいいと思いました。でもダイアルアップができないので, CD にやいてもらえるのはすごくうれしいです。 ・CD よりも練習プリントをもらった方が, 場所を選ばずできるので, 便利な気がする。 ・やりやすい形式でよかったと思う。 ・パソコンを持っていない人もいますので, 希望せいにすればいいと思います。 ・もらった CD がみれませんでした。 ・校内だけでなく学外からでもアクセスできる Web サイトにして欲しいと思う。CD 配布は良かったと思う。 ・プリントがわかりやすかったので, 学習用 Web サイトは, あったらあったでやりやすいですが, なくても困ることはないと思います。 ・このまま続けるべき。良い試験勉強になる。 ・CD などを使わなくてもテストは乗り切れると思うので, そういった教材を使う機会が少なかった。サイトや CD で学習した分だけ加点できるシステムであれば, より利用していたと思う。

ここでも学習ページを支持する観点からの意見は多かった。しかし, より詳しく見てゆくと, いくつかの特徴があることが分かる。ここでは四点指摘しておきたい。まず, 一点目。特に多かったのは内容的な改善にかかわる意見である。しかもミニテストのようなドリル的なページの支持あるいは充実化を求める意見が目立った。授業に対する直接的な補助学習の場としての評価が高いことの裏返しだと言える。一方, そうしたなか, 「楽しくやる」方向性を求める学生もいた。授業の予復習の場としての機能とドイツおよびドイツ文化に気楽に接する場としての機能との二通りの機能への期待という, 選択回答の傾向を補足する形になっていると言える。二点目は利用方法をめぐる意見である。家でもできるようにして欲しいという意見, 携帯用のサイトがあればいいという意見など, よりアクセスしやすくすべきだという意見が目だっていた。表 4 から分かる通り, こうした意見はもっぱら学習ページの継続を支持する学生たちのものである。ドイツ語学習ページが期待通りの反響を得ている証拠ととらえることもできる。三点目として指摘したいのは支持側とは反対の筈の継続について躊躇ないし反対している学生の意見の特徴である。彼らの意見をよく読んでみると, CD 配布については肯定的な意見を述べているなど, 記述回答では逆に肯定的な意見が多い。また, 否定的に述べている意見も, この試みそのものに対し何か問題を感じているというよりも, プリントなどですでに十分学習できるから特にウェブでの学習は必

要としないという、学習方法を選択する上での自主的な判断を述べたに過ぎないものである。ウェブで学習すると加点されるような仕組みであれば、もっと利用するのではないかという意見もあったが、このホームページのねらいはそもそも自主的に学習できる環境を学生に与えることである。その意味で学習ページははじめからオプションという位置づけであり、学生たちがそれぞれの学習方法に応じ、それぞれの関心とやり方で積極的に利用しているのであれば、そもそもそれで十分である。ただし、学習ページがあってもなくてもどちらでもいいと捉えられている背景には、そもそも授業の予復習以上の魅力をそうした学生たちが感じていないという事情があるのかも知れない。その意味で今後は授業外の内容も盛り込み、より総合的なドイツ（文化）紹介のページとしてこのページをいっそう充実させてゆく必要があるとも考えられる。また、一度目のアンケートにあったようにそもそも使用経験がないことが問題なのかもしれない。どのような内容なのか宣伝する、一度授業内で使わせてみるなど、手引きを与えることで学生の反応がまた一段と良くなる可能性もある。この点も今後検討してゆく必要があるだろう。最後に、四点目であるが、CD配布をめぐる意見も多かった。一度目のアンケートの際にはCD配布については六割以上の学生があまり期待を寄せていなかった。しかし、今回の記述回答においては「すごかった」とする意見があるなどCD配布への評価は高く、逆に否定的な意見は全く出てこなかった。また、配布方法については、今回取ったような希望制でのCD配布を支持する声もいくつか寄せられていた。ここから、こうしたやり方ならパソコンを持たない学生にも不平等感を感じさせず、家でパソコンで学びたいと考える学生に対してもある程度希望をかなえてやれるということが分かった。

4. 展望

以上、ドイツ語学習ページを紹介し、それに対する学生の反応をアンケート結果を中心に振り返ってみた。学生の反応はこちらが期待していた以上に良好であり、その点でドイツ語学習のページを立ち上げたことはひとまず成功だったと言える。ただし、この取り組みを始めるにあたって意識していたいくつかの問題の克服という点で考えると、まだ、道半ばでしかないというのも正直な感想である。振り返ってみよう。私が指摘しておいた問題は次の五点であった。

- ① 授業外のトレーニングを支援する必要性
- ② 自己学習の手引きの必要性
- ③ 苦手意識を持つ学生に対する自主学習支援の必要性
- ④ 言葉以外の学習の必要性
- ⑤ 一過的な教育を超えた教育ヴィジョンの必要性

このうち、①～③についてはウェブによる学習ページが十分に機能しそうだということが学生の反応やアンケート結果などから分かった。学生はトレーニングの場として学習ページを積極的に利用しており、表5で示した通り、小テスト対策だけでなく、授業を欠席してしまった際の内容確認などでも用いている。この点での今後の課題はトレーニング内容の充実である。学生の中からは問題量、あるいは出題方法の点で、もっと時間をかけて学べるものを用意するよう求める

意見もでている。今後、適時学習ページを追加してゆく必要があるだろう。また、学生の指摘にもあったように、学内限定での公開では十分にこの学習ページが活かしきれないという問題もある。CDの配布によってある程度学生の期待に応えられることは分かったが、しかしそれが根本的な解決になるとは思えない。パソコンを持たない学生の立場や今後入学してくる学生のパソコン所有の動向など、この点については引き続き慎重に様子をうかがってゆく必要があるだろう。一方、これにはウェブ学習によってどこまでをねらうのかという方向性の問題も関わってくる。パソコン中心にドイツ語を学ばせる本格的なCALL教材の製作を目指すなら確かに学内限定という今の公開方法では問題があるが、授業と自己学習との間をとりもつインターフェイス役、触媒役としての機能は今の体制でも十分に果たすことができる。学内限定のためパソコンの前にいる時間はあまり長くないかも知れないが、しかし、その間に授業内容をチェックしプリントアウトしたりできるし、苦手箇所克服のヒントを探ったり、学習したことがどれだけ身についているかミニテストをして課題点を確認するなどできる。自己学習に必要な情報や刺激といったものをウェブから得られるのである。その限りでは、課題はあるものの、現状でも必要な教育上の効果は十分ねえらえると考えている。

これに対し、④⑤の課題、つまり、ドイツおよびドイツ語文化・社会への関心の喚起、継続的な学習姿勢形成への刺激といった点については、現状では不十分な点是否めない。これはひとえに授業がらみのページの製作に追われ、それ以外のものにまでなかなか手が回らなかったという製作者側の問題による。しかし、限界があったにせよ、ミニ知識のページなどへの学生の反応はこちらが予想していた以上に良好であった。少なくとも学生の関心をかちとる余地はまだ大に残されていることは実感できた。ただ、今後本格的に④⑤の課題に取り組むのであれば、その際には別の角度からのアプローチも必要だろう。CALLの歴史は技術の進化とともに世代分けして語られることが多く、最新の、いわゆる第三世代のCALLの特徴はマルチメディアとハイパーリンクを生かした総合的でリアルな外国語学習の実現、そしてインターネット環境を生かした、生の国際コミュニケーションへの参加であると言われている⁵⁾ (『・・・『本当の現実』への興味と好奇心を促すもの、場合によっては学習者を『本当の現実』に直接結びつけるようなものでなければならない』と山本(2004, 10)は述べている)。新しい自前のページを製作するという以外にも、外部のサイトにリンクを張り、ドイツのページ、ドイツ語学習関係のページを紹介する、しかも単なるリンクではなく、その際に語彙紹介・背景事情紹介など教育上の工夫も加えておくなどし、インターネットを通じた学外の生のコミュニケーションへの参加を促したり体験させたりするといった発想も必要だろう。それはすでに単なる「学習」を超えたコミュニケーションの「実践」でもある。自律した学習者としての行動の幅を広げさせる貴重な経験にもなるだろう。この点についてはまだまだ改善の余地があるととらえている。

一方で、今回の取り組みからは、通常のCALL世代論とは異なる感触、つまり、単純な技術的な意味合いからの世代区分論、CALL進化論はもはや意味を持たないのではないかという感触も得た。初期の世代に分類されるドリル的な学習ページでさえ、はじめてドイツ語に接する学

生にとっては十分に意味を持つことが今回の取り組みでは実感できたからである。世代というところからえ方をするのであれば、むしろ大事なのは、今やCALLがある種文房具的に比較的容易に扱えるような段階に入ってきたという点ではないだろうか。世代や進化を言うのであれば、原始的といわれる柔軟な生命の方が環境に適応し、したたかに生き残れるという事実もある。技術先行、開発先行ではない、技術的には「軽く」ても教育のプロセスにうまくはまり込んだCALLというものを教育の作り手がそれぞれのニーズにあわせて作ってゆける時代に入りつつあるのではないだろうか。だとすると、それとともに通常の授業とCALLの関係も変化してくるのではないか。これまでCALLは通常の対面式授業を脅かす存在であるかのようにとらえられることも多かった。しかし、CALLがより文房具的な気軽さで使えるようになるとするならば、もはやCALLと対面式授業は二者択一の関係ではなくなってくる。授業を補う教室以外のもうひとつのメディアとして教育のデザインを幅広い視野で見直す契機になるのではないか。そこからより野心的な授業づくりもまた行えるようになるのではないか。実際、すでに見てきたように今回の試みに対する学生の評価の中心は授業の予復習への有用性にあった。つまり、学生の支持が得られた最大の要因は、表現学習のページや文法学習のページなど、授業とウェブのコンテンツとの間に密接な連携関係を作り上げることができたためなのである。CALLによる授業を狙ったものでも授業外で単独で学べるe-learningを目指したものでもなく、授業を補うことが前提の自己完結性の低いものであったが、しかし、いったん自分たちの学習を補助してくれるものだと分かれば、学生は逆にそれを積極的に利用する。そして、そこで学生を引き込むことができたなら、その支持を足場にして、さらに授業外でのプラスアルファをウェブから学生に伝えてゆくこともできる。授業とCALLとの相乗効果が期待できるのである。技術の持つ柔軟さを上手く生かした総合的な教育づくり。これは今後の一つの方向性になるのではないか。課題はまだあるものの、こうした点について一定の手ごたえを得ることができたというのが、今回の取り組みの中での最大の収穫であったように思う。

註

1. 例えば佐伯(1999)はオンラインドリル作成用ソフトWeb Exerciseを用いたドイツ語の授業づくりを報告している。使用の容易さ柔軟さなど、ウェブによる学習の利点を佐伯もまた強調している。
2. IBM社のホームページビルダー Ver.7.と教材作成エクステンションを使った。
3. 渡辺(2001)はCALLとともに教師の役割もinstructorとしての役割を中心としたものから、designer, presenter, architect, managerといった役割を加えた総合的なものによってゆくべきだと論じている。それによってともすれば教師中心だった授業をありかたも学習者中心なものに見直されることになる。しかし、非常勤講師やTAの存在など、教師と一口に言っても様々な立場がある。渡辺の役割論は単に教官一個の役割論としてではなく、教育に携わるスタッフ全体の組織設計の問題としてもとらえてゆく必要がある。

4. こうした課題意識を出発点とした授業外でのドリル学習による学習支援の取り組みを岩崎はすでに詳しく報告している (岩崎 1998, 1999, 2000)
5. 他にも担当したクラスはあったが、少人数のクラスであったこと、ウェブでの対応も文法と教科書問題の解答が中心で、他とは異なっていたため今回のアンケートからははずすことにした。
6. CALLの発展については境 (2000)、山本 (2004) を参照。

参考文献

- 岩崎克己「CALL教材の自主開発のために」、『広島外国語教育研究』, Vol.1, 1998年, 55-75.
- 岩崎克己「初修外国語授業支援のための自習用オンライン自動採点ドリル」、『広島外国語教育研究』, Vol.2, 1999年, 23-37.
- 岩崎克己「インターネット上で動く初級者用ドイツ語文法ドリル」、『広島外国語教育研究』, Vol.3, 2000年, 109-143.
- 佐伯啓「Webアプリケーションを用いたCALLシステム—WebObjectsによるWWW学習システムの構築と運用—」、『ドイツ語情報処理研究』, Vol.11, 1999年, 21-45.
- 境一三「CALL研究(1)」、『慶應義塾大学日吉紀要ドイツ語学・文学』, Vol.31, 2000年, 86-119.
- 町田・山本ほか編著『新しい世代の英語教育』松柏社, 2001年.
- 山本淳「CALL概念の変遷について」、『獨協大学外国語教育研究』, Vol.22, 2004年, 3-13.
- 渡辺浩行「教育メディアの活用と学習環境の変化」, 町田・山本ほか編著『新しい世代の英語教育』松柏社, 2001年, 79-124.

